

短期大学の英語教育の現状と目標

中島 直樹

1. はじめに

平成18年4月、城西短期大学において英語力調査が実施され、外国人留学生を除く82名の短期大学ビジネス総合学科新生が受験した。近年、短大を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。短大入学生の英語学力低下の傾向は年々顕著になり、特に優秀な学生の入学も以前に比べると少なくなった。それに加えて、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかを教員サイドがあらかじめ認識しておくことがより必要になった。このような観点から、新生全員に対して毎年英語力調査を実施しているが、その調査結果を基に、一年次の英語の必修科目である TOEIC イングリッシュ I A・I B (TOEIC のリスニングセクションに重点を置いた演習) と TOEIC イングリッシュ I C・I D (TOEIC のリーディングセクションに重点を置いた演習) を能力別のクラス編成にし、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図っている。

本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討すると共に、一年後の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して、どれだけスコアが伸びたかを調査し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。それに加えて、12月に本学で実施された TOEIC テストのスコアも比較・検討し、今年度新生の英語力の新しい傾向を分析していきたい。

2. 過去数年間の英語力調査の結果について

まずはじめに、平成14年度の英語力調査を振り返ってみたい。英語力調査は平成14年度以前にも実施されていたが、難易度の高い問題であったため、平成14年度に少し易しい試験問題を新たに採用した。年々、学生の英語基礎力が低下し、平均点が30点台に低迷するようになり、試験としては難しすぎると判断したためであった。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は一時

間、全50問で100点満点の試験であった。新入生のほとんどにあたる93名が受験し、全体の平均点は約56.9点であった。学科別の受験者数と平均点は表1の通りである。

表1 平成14年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67名	約57.8点
現代文化	26名	約54.7点
全 体	93名	約56.9点

平成12年度には文学科に英米文学専攻があったためか経営学科よりも文学科の平均点の方が高かった。この傾向は平成13年度にも続き、経営情報実務学科約35.3点、現代文化学科約36.0点（旧問題）と僅かに現代文化学科の平均点の方が高かった。しかし、平成14年度は経営情報実務学科の平均点の方が高い結果となった。このことは実際に授業を担当していても感じられたことであったが、それが数字の上にも表れた結果になった。実際の得点分布を見てみると、かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90点以上のかかなり基礎力のある学生が6名、次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名おり、その中間に30点から74点までの中間層があった。しかし、よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があった。60点から74点までの上位の層（26名）と45点から59点までの中位の層（24名）と30点から44点までの下位の層（20名）とにおおよそ分類でき、この3つの層が14年度の女子短期大学部新入生に占める割合は実に75パーセントを超えていた。

次に、平成15年度の結果について見てみたい。59名の新入生全員が受験し、全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表2の通りである。

表2 平成15年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47名	約55.0点
現代文化	12名	約52.6点
全 体	59名	約54.5点

平成14年度の英語力調査の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては2.8点、現代文化学科においては2.1点、全体では2.4点下がっていた。また、この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高い結果となった。

平成15年度入学生の英語力の特徴は、得点分布の中に表れていた。受験者数の減少のため、得

点分布グラフの形にある程度の変化は見られたが、基本的には14年度とそれほど変わってはいなかった。しかし、14年度と違う点は、90点以上はかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（14年度は6名）ことと、中間層とされてきた領域の形が逆転したことであった。30点から74点までの層を中間層とした場合、そこにはいくつかの山があったことが14年度の検証で分かっていった。そして、14年度は60点から74点までの上位の層に26名、45点から59点までの中位の層に24名、30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、平成15年度は上位の層に16名、中位の層に17名、下位の層に17名と、中間よりやや下に比重が移ってきた。

次に、平成16年度の結果について検討したい。43名の新生が受験し、全体の平均点は約50.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表3の通りである。

表3 平成16年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	33名	約50.5点
現代文化	10名	約50.4点
全 体	43名	約50.5点

平成15年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては4.5点、現代文化学科においては2.2点、全体では4.0点下がった。平成14年度から年々下降の一途をたどっていて、短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していることを如実に示す結果となっていた。この傾向はデータを採りはじめた平成12年度からずっと続いていた。また、この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高かった。

全体の得点の分布を調べてみると、基本的には15年度とそれほど変わっておらず、15年度の分布をほぼ継承していた。残念なことではあるが、90点以上はかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなったことも、中間層とされてきた領域の形が逆転したことも15年度と同様であった。それに加えて、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が5名となり、前年より3名減少してしまった。Aクラスといえども、それまで以上に絶えず基礎を確認しながら授業を進めなければいけない状況になった。中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に9名、45点から59点までの中位の層に13名、30点から44点までの下位の層に13名の学生がいた。平成14年度までは、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、平成15年度から中下位に比重が移り、その傾向は平成16年度も続いていた。良いとは言えない本学入学生の英語力の傾向であるが、そのことが年々、平均点を下げている最大の理由となっていた。

最後に、平成17年度の結果について検討したい。外国人留学生を除く80名が受験した。全体の

平均点は約56.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表4の通りである。

表4 平成17年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	57名	約56.9点
現代文化	23名	約55.5点
全 体	80名	約56.5点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては6.4点、現代文化学科においては5.1点、短大全体では6.0点上昇した。平成12年度から短大入学生の英語力調査のデータを採用しているが、前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。特に、平成16年度入学生の学力低下は甚だしかったが、17年度に来てようやく上向きに転じた。数値的に見て、平成14年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点の分布を見ても、短大全体では6.0点も平均点が上昇したので、まったく異なった形になっていた。90点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいなかったが、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名おり、この層が本学を引っ張る牽引車的存在になっていた。受験者数が80名なので、約4人に1人がここに属していたことになり、この年度の躍進を支えた原動力のひとつになっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が6名いたが、この割合は16年度とほぼ同じであった。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に18名、45点から59点までの中位の層に16名、30点から44点までの下位の層に21名の学生がいた。16年度は、得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、17年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。平成15年度から中下位に比重が移ってきていて、平均点を下げる最大の理由となっていたが、17年度になってようやくその流れが大きく変わった。

3. 今年度の結果について

今年度も昨年度と同様に、出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験とした。平成14年度から同一問題を使用しているので過年度との比較が可能である。外国人留学生を除く82名が受験し、全体の平均点は約48.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表5である。

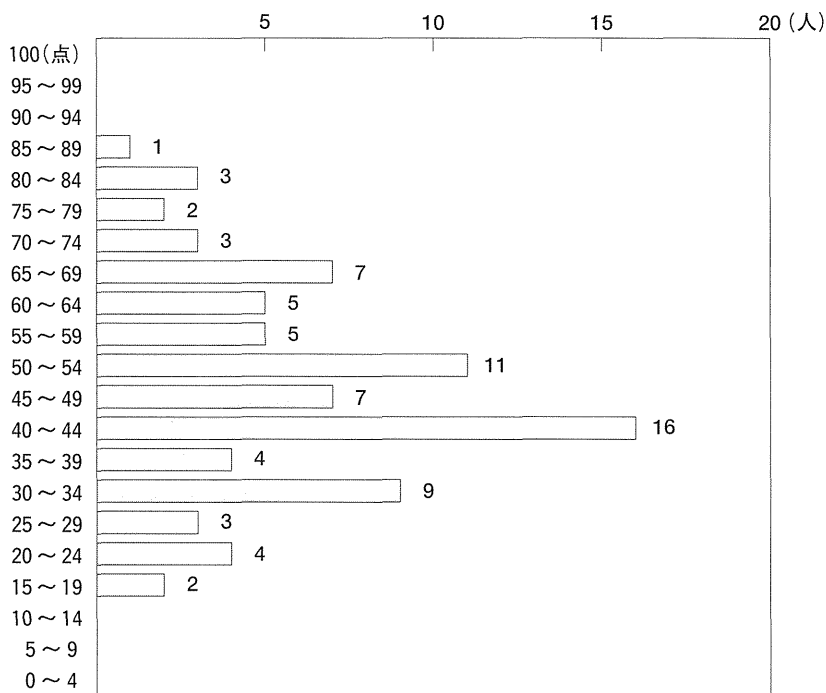
表5 平成18年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82名	約48.3点

今年度から経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが、昨年度の平均点約56.5点から8.2点下落の約48.3点となった。平成14年度からの全体の平均点の推移を見てみると、14年度：56.9点、15年度：54.5点、16年度：50.5点と年々下降の一途をたどり、17年度に56.5点といったん上昇に転じたが、今回また大きく下げている。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまったことは残念でならない。やはり、本学に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下傾向にあることは否定できないと思う。

次に、全体の得点の分布を見てみることにする。100点を5点刻みに分け、それぞれの得点層に何人の学生が分布しているのかを表したのが次のグラフである

平成18年度英語力調査結果得点分布グラフ（4月実施）



受験者数は昨年とほぼ同数であるにもかかわらず、グラフの形は昨年とまったく違ったものになっている。昨年はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。基礎力のない学生もいたが、基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に、昨年は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が

19名もいて、この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていた。しかし、今年度はその層には6名しかいない。ピークは40～44点のところであり、16名が集中している。29点以下のほとんど基礎力のない学生が9名いるが、この層に関しては、昨年の6名と大差がないと考えてよいであろう。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなかったことも昨年と同様である。では昨年と今年では何がちがうのであろうか。かなり基礎力のある学生の層とほとんど基礎力のない学生の層の間の中間層に目を向けてみると、その答が浮かび上がってくる。30～74点の中間層を3つの層に分類し、60点から74点までを上位の層、45点から59点までを中位の層、30点から44点までを下位の層として考えてみる。上位の層には15名おり、昨年の18名と大差はない。しかし、中位の層は昨年の16名から7名増の23名、下位の層は21名から8名増の29名となっており、中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目につく。つまり、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっているのである。昨年度は奨学金制度が充実していた年度でもあり、高校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し、ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが、今年度はその層が激減し、代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を8.2点下げている最大の原因であろう。

4. 問題の検証

次に、実際に出題された問題を検討し、正解率の高かった問題や低かった問題等について特に気づいた点を検証していきたい。

まず、最も正解率の高かった問題は10番と37番であり、正解率は79.2%であった。

(10) A : I don't know () Central Park is.

B : It's not far. I'll show you.

1. who 2. when 3. where 4. whose

昨年は81.2%の正解率であった。不正解者の多くが2を選んでいたのは昨年と同じ。

(37) A : I'm sorry to be late. The bus didn't come on time this morning.

B : ()

1. This afternoon. 2. Don't worry.
3. Yes, you can. 4. No, I didn't.

最近の学生はこのような会話形式の問題には慣れているようだ。

次に正解率の高かった問題は1番であり、正解率は78.0%であった。

(1) A : Do you know what language is () in Mexico ?

B : Yes. It's Spanish.

1. thrown 2. lent 3. spoken 4. told

次に続くのは2番であり、正解率は74.3%となっている。昨年度は80%であった。

(2) A : Excuse me. Can you tell me the way to the post office ?

B : Sure. () straight down the street. It's on the right.

1. Break 2. Catch 3. Go 4. Put

反対に、最も正解率の低かった問題は36番の

(36) A : Can you visit our farm in Canada this summer, Ken ?

B : ()

1. Yes, it's mine. 2. No, I haven't
3. No. There's a farm. 4. Sure. I'd love to.

であった。正解率は14.6%で、半数以上が3の選択肢を選んでいった。

正解率が20%以下の問題がもう1題ある。

(26) Be kind () old people on the train.

1. at 2. to 3. of 4. from

正解率は18.2%で、4人の内3人近くが3と解答していた。

次に、気づいた点をいくつか述べよう。

(6) A : This is a report () I wrote in Japanese yesterday.

Could you check it for me, Jiro ?

B : OK, Laura.

1. which 2. when 3. who 4. whose

関係代名詞の基本的な用法であるが、正解率は3割以下。4割以上の学生が2と答えている。

(8) Mr. Harada went to Kenya () pictures of African animals.

1. takes 2. took 3. taken 4. to take

この問題も短大で勉学を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題したが、正解率は26.8%と低かった。7割以上の学生が不定詞の基本的な使い方を理解していないという信じられない結果が明らかになっている。選択肢1, 2, 3を選んだ学生はほぼ均等に分散している。

1番から35番までは基本的な文法・語法、36番から40番までは会話、41番から50番までは日常的な作文の力を見る出題をした。今年の学生は特に基本的な文法が弱く、中学校レベルでつまづいている現状が明らかになっている。

5. 12月実施の英語力調査およびTOEICテストの結果について

これまで、4月に実施された英語力調査を基にして、今年度の学生の英語力を分析してきたが、

12月の後期の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施し、どの程度スコアが伸びたかを調査した。第1回目（4月実施）と第2回目（12月実施）のテストの平均点と得点差をまとめたものが表6である。

表6 英語力調査結果比較

第1回目	第2回目	得点差
約48.3点	約53.8点	プラス5.5点

72名が受験し、第2回目の短大全体の平均点は53.8点で、第1回目より5.5点上昇した。昨年度は、経営情報実務学科が58.3点でプラス1.4点、現代文化学科が58.9点でプラス3.4点、短大全体では平均点58.4点で、1.9点の上昇であった。平成16年度を見ても2.3点の上昇（Aクラス）に留まっていたので、今年度の5.5点上昇というのは過去最大の上昇幅ということになる。短大入学時には全体的なレベルは低かったが、1年間かけてしっかり教育し、何とか例年のレベルまで引き上げられた結果が表れている。もちろん得点を下げた学生もいるが、多くは現状維持か得点を上げている。4月の段階では、29点以下のほとんど基礎力のない学生が9名いたが、12月には5名に減っており、多くが得点をアップさせている。また、ピークも40～44点（16名）から50～54点（12名）に移動しており、全体的な底上げを物語っている。4月には90点以上の学生はゼロであったが、12月には2名おり、しっかり勉強した学生は着実に結果を残していた。

また、今年度も、Aクラスの学生に対しては、12月に本学で実施された第4回TOEIC IPテストを受験するように指導し、14名が受験した。全学との比較は次の表7の通りである。

表7 第4回TOEIC IPテスト結果

学 部	受験者数	平均点
短 大	14名	240点
全 学	344名	278点

全学で344名が受験し、平均点は278点であった。短大Aクラスの最高点は335点、平均点は240点であり、全学の平均点を下回っている。16年度のAクラス最高点は340点、平均点は246点、17年度のAクラス最高点は360点、平均点は287点であった。このことから、今年度の学生の方が学力が低いことが窺える。

6. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。今年度の英語力調査（4月）では平均点48.3点と過去最低を更新した。特に、昨年は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名もいて、この層が本学の平均点を引き上げていたが、今年度はその層は6名になってしまった。その減少分が中間層の中でもとりわけ中下位の増加となって膨れ上がり、平均点を8.2点下げた原因となった。中学校レベルでつまづいている学生も多く、基本的な文法の理解の弱さが目についた。多難な出発であったが、1年間たえず基本を押さえながら授業をすることによって、何とか平均点を過去最大の5.5点上昇させることができた。12月になってやっと例年のレベルまで辿り着けたというのが率直な感想である。今後は、更に基礎を確認しながら授業をすることが求められると思う。12月のテストでは90点以上の学生も複数出てきており、彼女達を中心とし、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層を加え、2年次のインテンシブ・イングリッシュを履修するよう指導していくつもりである。卒業までに何とかTOEIC400点レベルの学生を育てることが今後の目標である。短大に入学して、しっかり勉学に励めば確実に学力がつくということが今回の2回の英語力調査でもはっきりしているの、一つでも上のレベルに到達できるよう何とか鍛え上げ、少しでも英語力をつけさせられるような指導をしていきたい。